



清水達也 編
『次世代の食料供給の担い手
—ラテンアメリカの農業経営体』

日本貿易振興機構アジア経済研究所 2021年 170ページ

ISBN 978-4-258-04645-4

私たちが享受している今日の豊かで便利な食生活は、ラテンアメリカ諸国からの農産物の供給なしには成り立たない。ブラジルやアルゼンチンが輸出する大豆やトウモロコシをエサとして育った家畜が、鶏肉や豚肉となって安価な価格でスーパーの店頭にならぶ。ブラジルやアルゼンチンが輸出する冷凍肉が、フードサービスの原材料となり、弁当やファミリーレストランの料理として提供される。また、アスパラガスやブドウなどの青果物は、メキシコやチリが輸出することで年間をとおして食べられるようになった。アボカド、マンゴ、ブルーベリーなども、ラテンアメリカからの輸出が増えたおかげで、店頭でよく見かけるようになった。ラテンアメリカからの農産物の輸出は近年大きく増加していることから、この地域の生産者を次世代食料供給の担い手としてとりあげたのが本書である。

本書では、ラテンアメリカの農業部門に詳しい研究者が、メキシコ、チリ、ブラジル、アルゼンチンの農業生産者やそれを支える農業金融の近年の動向を分析した。メキシコは北米向けの輸出農産物の重要な産地であるが、同時に零細・小規模生産者も数多く存在している。それらの生産者が競争力を維持するために設立したのが生産コーディネイト企業である。個別の経営体が独立して生産しつつも、それ以外の資金調達、資材調達、農産物販売を生産コーディネイト企業が専門に請け負うことで、全体として競争力を保っている（第1章）。チリでは果樹栽培と輸出を手がける企業が規模を拡大することで生産性を高めている。とくに労働集約的な生産現場では、季節労働者の管理が競争力を左右する（第2、3章）。一方、ブラジル中西部の大規模穀物生産企業は、労働者の監督や職場環境の整備をはじめとする経営組織の革新に取り組みながら、農業生産を拡大している（第4章）。ブラジルやアルゼンチンでは金融機関による農業部門への融資が十分ではなかったが、バリューチェーンのなかで資金を調達することで生産者は必要な資金を確保している（第5章）。

途上国の農業生産者に関する研究には、家族経営や零細・小規模生産者に焦点をあてたものが多い。これらの生産者が、農村社会の維持や国内市場向けの食料生産で大きな役割を果たしていることは間違いない。しかし国際市場への農産物供給を増やしているラテンアメリカでは、これら伝統的な農業生産者とは異なる、新たな経営組織や経営管理の方法が次々と生まれている。これらの多様な生産者によるイノベーションから、私たちは多くを学ぶことができる。

清水達也（しみず・たつや／アジア経済研究所）